

第41回機械工業デザイン賞 最優秀賞・経済産業大臣賞 受賞記念 トップ対談

世界のモノづくりをサポートする
トルンプ レーザーテクノロジー

独トルンプは日本市場にマッチした商品構成で、順調にブランドイメージをアップさせている。世界で戦略的に展開する最先端のレーザー技術を武器に、次世代のディスクレーザ加工機など高次元の製品群を次々と日本市場に投入。併せて、レーザ発振器の日本生産にも乗り出す。そうした中、同社の戦略製品の一つ、ディスクレーザ2次元加工機が日刊工業新聞社主催の「第41回機械工業デザイン賞」で最優秀賞・経済産業大臣賞を受賞した。今後の製品戦略や世界の製造業の潮流などについて、独トルンプ工作機械のマティアス・カミューラー社長に、日刊工業新聞社の井水治博社長が聞いた。

独トルンプ工作機械

マティアス・カミューラー社長

外資系企業で初の
経産大臣賞

井水 次世代型ディスクレーザ加工機「TruLaser 5030fiber」が第41回機械工業デザイン賞の最優秀賞・経済産業大臣賞を受賞しました。外資系企業では初の最優秀賞の受賞であり、洗練された技術とデザイン性などが評価された結果だと思っています。改めて今回の受賞をどうとらえていますか。

カミューラー 受賞は非常に光栄であり、大変名誉なことと感じています。「TruLaser 5030fiber」は高い加工性能など優れた点が数多くありますが、一番の革新的な点はレーザ発振器に固体レーザ「TruDisk」を使用していることです。これまでの二酸化炭素(CO₂)レーザ加工機と比較して、加工速度が最大で4倍も高速化でき、エネルギー消費量も半減できます。他のレーザ加工機と比べてもコンパクトで、自由な工場レイアウトができる点も優れています。

井水 「TruLaser 5030fiber」はトルンプの掲げる「レーザネットワーク」を実現した機械でもありますね。
カミューラー そうです。トルンプでは「レーザネットワーク」というコンセプトを提唱し

客がレーザ溶接をどのように使うべきかを当社が積極的に提案するとともに、当社のレーザ加工機がもたらすレーザ溶接の優秀性を広く訴求していると考えています。

レーザ溶接が
大きな武器に

井水 「レーザネットワーク」で生産効率を向上できれば、製造現場の生産革新、ひいては市場競争力が進展しますね。

カミューラー 大きな競争力になります。例えばレーザ溶接は高速・高品質だけでなく、コスト的にも安価にできます。従来に比べ約60%も加工時間を短縮できます。また、今までは溶接後に垂取りや仕上げ加工など



次世代型ディスクレーザ加工機「TruLaser 5030fiber」

変種変量生産市場にマッチ
「レーザネットワーク」で競争力を

す。例えば大手自動車メーカーが海外に生産拠点を構えれば、必ずその周辺に強力なサプライヤーが立地するようになります。グローバル化が進む中で薄板加工や厚板加工など、レーザ加工の種類によって必要な機種が求められ、需要が増えているわけです。

井水 レーザ加工機としてこれまで1万7500台以上、レーザ発振器を年3000台以上供給しています。世界市場でなぜこれだけ受け入れられているのでしょうか。

カミューラー 最大の理由はイノベーション(革新)です。レーザ技術のイノベーションを図るために、継続的に技術研究に取り組みんでいます。当社の製品は大手の自動車メーカーの生産ラインなどに導入され、日々の生産活動を支えています。最先端の自動車産業の生産技術ベンチマーク(目標)とし、多岐にわたる市場にマッチした高品質の商品開発に結びつけています。サプライヤーなどとの緊密なコミュニケーションを図り、ニーズ収集に努めています。産学連携などにも積極的に取り組み、技術力を向上させています。また当社は加工機械だけでなく、レーザ発振器など機械のコンポーネント(要素部品)も自社開発していることも強みの一つです。

発振器 来春にも
日本で生産開始

カミューラー ドイツで技術開発した製品を、当社の全世界の最大の生産拠点の一つであるレーザ発振器を来春に日本生産の最適化を図るために日本に生産開始します。発振器はレーザ加工機の中核技術です。日本での生産開始で、日本市場をさらに深耕していきます。

井水 ドイツも日本も、世界の製造業をけん引している点で共通しています。ただ新興国市場への生産シフトも加速する中、モノづくりの競争力をどう保持していくべきかと考えていますか。

カミューラー ドイツと日本では考え方が少し異なります。ドイツでは中国や台湾など生産コストが安価な地域にモノづくりが移ることに對して、その心配はしていません。ドイツは自国のモノづくりに自信があります。一方、日本のモノづくりは中国など労働力の安いところにシフトすることを心配しています。そこが違うのではないかと思います。日本のモノづくりは世界的に競争力があります。生産シフトでモノづくり力が低下することに対し、心配する必要があります。日本の生産技術は高次元であり、従業員も

非常に熱心で勤勉です。日本のモノづくりは今後も衰えることなく進展していくでしょう。

井水 一般に、日本の機械メーカーは高機能な商品や実用的で機能を絞った比較的廉価な商品を開発するなど、地域ニーズに対応した作り分けをしています。新興国市場が展開する中、グローバル戦略をどのように展開していますか。

カミューラー グローバル戦略は非常に明確です。グローバルでは三つの市場群とそれに合わせた戦略があります。一つはハイエンド市場。日本やドイツなどが対象で、生産性の高いレーザ加工機とレーザネットワークやパワーステップ複合加工機、そしてレーザ溶接機など高付加価値の機械を提供していきます。2番目は米国やスペイン、イタリアなどの南欧、東欧諸国です。これらは、一部はハイエンドのニーズに対応しますが、よりフレキシブルに対応でき、シンプルな機能の機械を求めています。最後は中国やインドなどの新興国市場です。一部でハイエンドを求める企業もありますが、ロープライス(低価格)でフレキシブルなニーズに対応した製品の提供です。周知のように、新興国には巨大マーケットがあります。特に中国は急成長しています。また、中には日本やドイツなどと同じようなハイエンドの機械を求める声もあります。中国はレベルの向上が非常に速い。基本はいかにして市場にふさわしい機械をタイムリに投入していくかであり、考え方は非常にシンプルです。

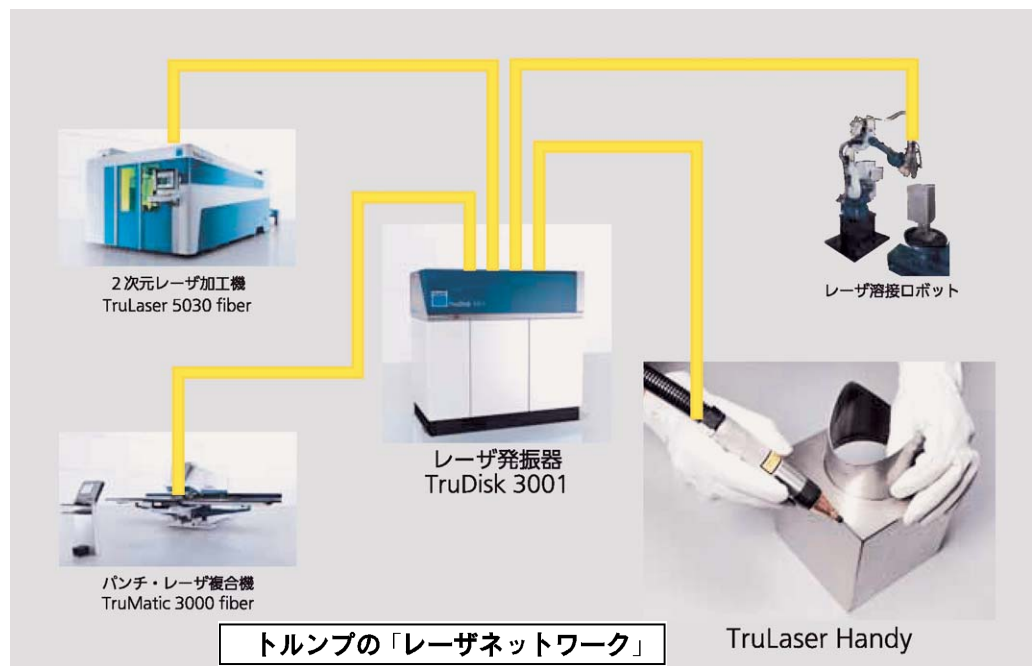
井水 トルンプは新製品・新技術の開発力が強みといえます。今後の中長期的な経営ビジョンをお聞かせ下さい。

カミューラー 当社は60年前に事業をスタートして以来、毎年15%ずつ成長しています。今後この成長率を継続していきたいのですが、そのためにはユーザーニーズにマッチした新技術、新製品の投入が必要となります。また、レーザ技術がいかなるビジネスチャンスを生み出していくのか、技術的な高さをかみながら、まだまだつかみきれない部分があります。今後もレーザ技術の開発に力をつけていきます。レーザ技術が我々の希望をかなえる源泉となることは間違いありません。



日刊工業新聞社社長

井水 治博



トルンプの「レーザネットワーク」